

---

# 勇者と魔王の戦い

tanaku

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者と魔王の戦い

### 【コード】

N7032Z

### 【作者名】

tanaku

### 【あらすじ】

主人公補正の付いたアイツを俺が殺す話。

あらすじが適当で本当にごめんなさい。

## プロローグ

世界には常に主人公が活躍を続ける。虐げられるのは何時も魔王であり悪役であり敵である。

何度憎もつと何度声をあげて泣こうと現実が変わりはしない。

そして俺が奴に勝てる日は永遠にないのだろう。

アンパンがバイキンに勝つように主人公はどんな窮地だろうと逆境だろうと関係なくこちらを追い詰める。

ああ俺が勝てる日は来るのだろうか？

第一話 始まりは突然に急激で世界は眩しいほど俺を憎んでる。

俺は高校2年生の運動神経は抜群で成績はいつもトップ、一回見ればそれだけで完璧にどんな技でも真似できる超天才。黒髪のサラサラヘアで切目の茶色い瞳の身長176センチのイケメンで女子にはモテモテだ。バレンタインデーの日なら食べ物に困ることはない超ハーレム男で名前は工藤時亜<sup>くわだときあ</sup>。その神に愛された子であろう

そいつを遠くから殺気を軽く立ち上らせながら睨んでいる高校2年生で同じクラスの菊池宗也だ。

俺の運動神経は上の上、成績はいつも2番目、5回やれば大抵のことではできる秀才だ。

女子にそれなりにもて、かなり能力値の高い所詮一般人の高校生だ。

そう、所詮一般人なのだ。アイツとの差は大きすぎて埋まるどころか差はどんどん開くばかりだ。

俺のあだ名は「二番目に神に愛された男の子」だ。

中学3年生のころの俺は誰よりも輝いていた。まるで俺を中心に世界は回っていたと言っても過言ではない。

そして、2学期最後のテストをこの前すべて受け終えたところだ。テストも終わり答案用紙が返ってきた。

「菊池」

「はい」

このとき俺はテストの点数が実は分かっていた。そのため教室を歩く足取りも軽くはずんでいた。

「また満点だったな。先生も鼻が高いぞ」

「いや俺はただ一生懸命努力して奇跡的に取れただけですよ」

「謙遜はしなくて言いぞ。100点を取って謙遜をしていたら何を

お前はほこるんだ？」

先生がそう言うと数人が笑う。

俺としては何も面白くないんだが先生に合わせて「そうですね、気をつけます」と言っておく。

俺は先生の戯れ言などろくに聞いていなかったがテストで100点を取ると言うのは気持ちのいいものだと心の中で高らかに笑った。

勉強が一番なのは当たり前、100点など毎回ある定期テストで必ず一回は取るような天才だった。

友人たちもやはり俺を褒め称えた。

「やっぱり俺はお前には勝てねえよ」

「だってお前とは格が違うしな」

女子も男子もみんなが俺をほめる。俺はここで完全に自分の能力が誰よりも高い事を信じて疑わず、上がったといえるとしても世界で数人くらいだろう完全に天狗になっていた。

「皆も頑張ればできるさ」

まあ、無理だとは思うけどな。だって俺はお前ら欠陥品どもとは違うんだ、授業を受けてもすぐに忘れ自主学习を何ページやっても俺がしたたかが1ページにさえ遠く及ばずるくに点数も取れない。

所詮不良品のお前らは地べたで這いつくばって一生懸命血を吐くような努力をしてやっと俺と同じくらいの視線で見ることができんだろうな。

だが所詮これはクズの悪あがきだ。

そして何年もたってやっと知るんだ。圧倒的才能の差に、生まれ持った力の差を、クズと天才の隔て目をな。

アニメの様に馬鹿が天才に勝つことなどない絶対的な現実だ。

運命は逆転しないからこそ運命なんだ。

俺は桜が舞い散るその季節新たな学校へと向かっていた。

道にはたくさんの新入生が俺と同じように歩いている。

そこでふと一人の男が目についた。

そうこれが高校の入学式でのそいつとの恨むべき出会いだっただ。桜が俺たちを鮮やかに迎える中、アイツはそこにいた。

この新入生がざわざわと蠢いているその真ん中にソイツの周りだけ周囲が神々しく輝いているようにソイツはそこにいた。言いようもない恐怖が背筋に走る。

直感する「ああ、俺はこいつに勝つことができない……………い。」俺が負けを認めそうになるほどの威圧感を放つ男。

世界で数人しかいないであろう天才の俺と肩を並べるところか俺がそこ等辺にいるクズと罵っていたやつ等と同じ扱いを受けてしまう程の魅力、才能、運。すべてにおいて俺はソイツに負けていると感じた。

そんなことがあるはずがない。背筋からいやな汗が次々と流れてくる。

目はソイツから放すことができないまま俺は棒立ちになる。

だがもし本当に……………俺が負けているとすれば。

悔しい、もし負けているとしているなら、考えるだけで敗北感が俺に漂う。

この気持ちはいつたい何なんだ。  
今までの俺はなんだったんだ？

テストでも一番だった。運動神経も一番。全てのあらゆる能力においてこれまで一番だった。

中には優秀な奴も何回も見た。だが、そのすべてが俺の足元にもおよびなかったんだ

その俺が完全に負けているだと？

あるわけないんだそんなこと。

そつだまだ負けたわけじゃない。

俺はこのとき今まで培ってきた自信を行動に置き換えて

最後の悪あがきとしてソイツの反応、周囲の目線、思考、能力のすべてを観察し考察していく。

見た目は完璧、服にはチリの一つ汚れの一つ皺さえもついていなかった。服装は完璧だ、しかしそれなら俺も完全にチリや皺、自分の黒髪の先までしっかりと決めてきた。

周囲の連中の服装を見れば新品だとしても少しの汚れ、乱れがあるのだ。

そこから入学式が始まるまでの間ソイツの様子を観察し続けた。

ソイツは入学式までの間何一つ不自然なことをせず周囲の様子や他の生徒の様子をくまなく見ていた。

ソイツと一瞬目が合った女の子は瞬く間に頬を赤くして俯いていく。俺にも何人かは新入生の少女たちも反応しているが……

ソイツの比じゃなかった。

容姿はほぼ同じくらいにしても完全に魅力で負けている。

だが、俺は完璧なんだ。俺の下はチリの数ほどいようと上は世界に数人さえいるとは思えない。そして容姿で負けたのは生まれて初めてだ。俺の目は日本人特有の黒髪黒目で切れ長の目と丹精に作られた造形美と言っても過言ではないほどの顔つきだ。

告白なんてよくされるし、人の心も読むのはかなり得意だ。

しかしソイツの容姿、仕草はまったく別のものだった。

俺が完全なるタイミングと相手の心を読みながら人の心を完全に落としていくのに対し、

ソイツは何もしなくても勝手に意中の相手が恋に落ちていき更に周囲を巻き込む形で自分に惚れさせていく。

これじゃあ完全に無理ゲーだ。

相手が主人公でチートでレベル9999に対して、俺はただの魔王でありながらレベルも9990と言う他の相手にはまず何があっても負けないだろうが主人公だけには運命的にもストーリー的にも絶対に負ける事が確定している存在という事だ。

ゲーム的に例えたが何が言いたいかというと、

完全にソイツには世界が味方しているし神が味方していて敵以外の悪役以外のすべてがやつの味方と言うことだ。

だがそんな事あっていいのか？これは現実なのか？あんな完璧な奴が存在していいのか？



いいや駄目だ。あいつはあの場所から引きずりおろそう。そして俺が一番になる。  
今まで俺より上の奴がいなかっただけで俺はいた時のことも考えていた。

そう、消せばいいのだ。

この世界から。

入学式が始まる。ここから俺の悪夢は俺への浸食を洪水のように始めていった。

体育の授業のサッカーもアイツが敵のとき俺は1点さえ入れられず。最初のテストでアイツはオール教科満点で（俺は4科目100点だった）一度でさえ1位を取ることができなかった。

俺は負けるたびに毎晩涙で枕を憎しみに濡らしながらも誓う。

あいつを倒すと。すべての立場を逆転させあいつの存在をぶち壊し崩し塗りつぶし俺が主人公になると。

たとえ世界がすべて俺の敵であつても味方が一人もいなくとも俺はあいつを舞台から引きずりおろすと。

すべては俺のために。

ソイツ……ソイツの名は工藤時亜。工藤は常に全ての人間に好かれた。ソイツが失敗などしたことはないが先生も友人も俺と

後で見つけた工藤の敵であろう人間以外のすべての人間は  
工藤の行動のすべてに好意を向ける。

そして工藤も同じように友人が笑えば笑い。先生が褒めれば喜び、  
すべてに対して完璧な反応を取っていたまるで昔の俺のように。

俺はこの学校で工藤に会ったときから変わった。  
勉強でろくにしたことのない自主学习も工藤に勝つため本気でやっ  
た。

先生たちには前の6倍は好印象を与えるであろう受け答えをしてい  
き、裏では工藤を陥れるためだけに他の生徒の鞆に工藤がやったと  
思えるであろう落書きやいたずらを偽装した。そして、おのすべて  
失敗に終わった。

他にも俺が操りやすそうな暴走族を支配しそいつ等を使って工藤を  
殺すために俺がまず告白を装っておびき寄せたりしたが工藤は暴走  
族35人を完膚なきまでに制圧していき完全に体が動けないような  
体にしていく。

俺もその程度の事なら簡単にできるため暴走族が工藤に飛びつくそ  
の瞬間を狙って自作グレネードを投げた。

タイミングも完璧だったためそのまま放置して帰った翌日、工藤は  
何もなかったかのように右腕に包帯をして学校へやってきた。

俺は歯軋りをしながら体が恐怖で身震いをしていくのを必死で我慢  
しながら尋ねた。

「その怪我どうしたんだ？」

俺は背筋に冷や汗をかきながら聴く。

「ああ昨日帰り道にたまたま暴走族に会ってね。少しやられたんだ。

でも、まさかあのタイミングでグレネードが来るとは思わなかったよ。あれは暴走族の人が盾になってくれなかったら今でも冷や冷やするよ」

工藤は笑いながら俺に言う。周りでも「工藤君かわいそー。大丈夫」と心配そうな声で聞こえてくる。

だがこいつは俺に対して一瞬、正義が悪を正すような目をしてきた。こいつは出会ったときからこの目をする。そして此奴は俺がやったことも知っていた。

だが、こいつは俺を裁かない。

余裕何だ、まるで俺程度じゃいつまで経っても自分に勝てないというように。

ある日の放課後、

工藤は俺に誰もいない廊下で俺に話しかけてきた瞬間、言った。

「僕を憎んでいるんだろ？」

そして僕を殺そうと強いている。それも僕の評判を下げた後、誰からも馬鹿にされるくらい貶めた後にね。

でも君じゃ無理だよ。どうせ僕には勝てない』二番目に神に愛された男の子」

まるでその通りだよ。

所詮気味は君は二番目。君は僕のいない世界なら間違いなく一番だっただろうね。

でも、君は僕がいる限り二番目なんだよ」

その瞬間、俺は絶望に打ちひしがれた。俺は恐怖で後ずさりそうになる。

世界が違う、こいつは勇者だ。魔王じゃ勝てない。運命に抗うことはできない。

ストーリーはどんな展開になっても魔王のままじゃ勝てない。

悪役は負けるように最後には俺は倒される。

そして、こいつには俺なんかじゃ勝てない。頭の中で言葉が反芻していく。

やめろやめろやめろ。

俺は負けない。奴の言葉に耳を傾けるな。

俺は勝つんだ。こいつを王座から引きずりおろし皮をはぎ皮を燃やし肉体を破片が残らなくなるまで完全に消すんだ。

俺が一番になるために。世界一の人間になるために。

俺を正面から見て言った。「俺が勝つその日までお前はその玉座で甘い蜜を吸っていればいい。俺はお前を必ず殺す。運命は俺が変える」

工藤はそう言った俺の顔を見て言った。少し不機嫌そうに笑う。

「ふふっ、できるもんならやってみなよ」

挑戦的な物言いに俺は言葉を返さず絶対的野望を持って工藤の前を通り過ぎる。

「工藤、絶対にお前をそこから引きずり落としてやる」

そして先ほどの会話に戻る。

暴走族が盾になってくれた？笑えるぜ。俺のタイミングは完璧だった。

つまり何がどうあっても避ける事は不可能だったはずだ。

命中率100%の攻撃をよける方法は自分が防御をしない限り避けるのは無理、つまり神の加護とでもいうべきか。

工藤は俺の様子を見ながら「やっぱり君じゃ僕を殺す事はできない」という目を向けてくる。

あくまで表情に出さないこいつは本当に腹が立つが俺も表情には出さず「そうなのか、気をつける」と内心はどうやって貶めるか考えながら言う。

そして次は神の奇跡を越える攻撃をしないと意味がないと言うことだ。

工藤のことだ、核を奴を中心に落とすとしてもしない限り殺すのは99%失敗するだろう。

それでも俺には核で焼けた更地の真ん中で傷だらけになっても「ざまあみる」と言っている工藤の腹立つ顔が目につく。

工藤と別れてあまりの腹立たしさに思わず笑いが出る。

神の奇跡だと、そんなものにどうやったら勝てるんだ？

「ハハッ」

憎しみと憎悪の混じった笑いはこの世界の誰にも聞こえることはなかった。一人を除いて。

「次は殺す」

更なる決意を胸に秘め呟く。

体育祭、文化祭と行事が立て続けにある時期が終わった秋の帰り道、俺は電車を降りて誰もいない道を歩く。

誰もいないというのは珍しくこの通りは最低でもいつも2、3人は歩いている。

まあこの頃はあるクラスメートの性で俺は非常にご機嫌斜めなため一人に慣れて逆に構わないが。

紅葉が道に少しかかっている紅葉の道は俺の奴への憎しみを紛らす効果を持っているため気分が少し良くなるのもいい。今度からこの道は俺の愛用の道ということにしよう。

紅葉の景色を眺めなが歩いてみると前方に人影が見えた。

「あれ菊池君じゃないか、こんにちわ」

俺の認定は瞬間的に解除された。

だが予想はしていたため俺の心中への被害は少なかったものの実際に会ってしまふことで限りなく俺のテンションは低くなった。そしてこのクソ勇者への暗殺を含める嫌がらせは俺が幾ら完全犯罪による難易度の高さを無視したところで、俺の嫌がらせなど勉強の片手間だともいうように全く心を動じさせない工藤は人間じゃないと予想している。

工藤はまるで久しぶりに会った親友に会った時のように笑顔に花を咲かせながら俺を見ながら歩いてくる。

その顔に何度俺は敗北したことかと思いつながら俺は目の前でやっている工藤と同じような憎しみを貼り付けた笑顔を作る。

表現は「一番嫌いな人間に自分のテンションが少しい時に偶然会ったとき見せるあの、何でお前生きてんのかという表情」だ。直訳で「工藤は死ぬ」だ。

「奇遇だな工藤、こんな誰もいないときに。それと俺のテンションもがた落ちだ」

「そうだね、僕たちは誰もいないときにはよく合うよね。僕のテンションは今も昔も最大値だよ」

そつだ工藤のいう通り俺と工藤は誰もいないときこそよく会う。そ

してこいつはマジで殺す。

「俺は帰る。工藤も帰れ、そして死ね」

「そう？それじゃまたね。ていうか殺すなら今殺してみれば」

「ここにこしながら言う。その笑顔は女子に対して使うものだろう？と問いかけてやりたいが我慢する。」

「証拠が残るのと残念ながら俺の運動神経じゃギリギリのあと一歩で勝てないからそんな無駄なことほししない」

そう言って俺が奴の目に自分の手に持っていたシャープペンを投げながら工藤の横を通り過ぎようとしたとき、

工藤と俺の下に黒い穴が広がる。穴は俺と工藤を取り込んだ。

投げつけたシャープペンは俺と工藤が禍々しい黒い穴に取り込まれたため空を切る。

「「は、？」」

穴に落ちていく俺と工藤。

よりによってこんな非現実的なことで死ぬなんて……………。

「くそっ」

咄嗟に回避方法を考える。工藤の上に乗れ落ちた時の衝撃をやわらげ。

そう思って工藤を探すが工藤がない！

そして俺の意識は暗い闇に落ちていく。

地面に残ったのは真新しいシャープペンだけだ。



魔王と勇者はいつになっても変わらず戦い続けた。魔王は恨みを魂に刻み何度転生してもその刻まれた憎しみにより勇者を殺そうとした。魔王は何度万全を尽くしても世界を勇者以外消したとしても勝つことは1度さえなかった。

最初に戦いは王に命じられたのがきっかけだった。勇者は戦いにより涙を失い感情を失い家族を失いすべてを失った今もまだ戦い続ける。勇者に残ったのは無意味な勝ちだけだった。世界は何度再生しようとも二人の戦いを止められずその悲劇はいつの時代も大陸をむしばみ、  
不必要な犠牲を出した。

彼らが戦いをやめることを日を世界は待ち続けた。

ある深い深い森の中、そこに白い肌と蛇のような眼をした赤ん坊が一人泣いていた。周りにいるのは凶暴な獣たち、彼を発見すればすぐさま獣たちは彼に飛びかかり殺して食ってしまうだろう。しかし彼の周りにはまるでバリアが貼つてあるように猛獣たちは寄つて行かない。

赤ん坊が一度目を覚ます。

目を覚ました赤ん坊に木々から銀色の花粉が飛んでいく。

赤ん坊にあたると赤ん坊は次第に大きくなっていき小学生くらいの体系になっていった。

最初は呼吸も少し荒かったが少しの間すると回復したようで柔らかいほほ笑みを見せた。

赤ん坊から多きくなったその少年はまた深い眠りについていく。

そして彼こそは現代で神に2番目に愛されたであろう少年、菊池宗也だった。

~~~~~

意識が戻った時俺は体が動かさず更にナイフで切り裂かれたような痛みにより目は開けられないまま、  
二日ほど眠りについた。

起きた時、周りには日本の大都会にはないであろう大樹が周りを覆っていた。

ろくに動かないからだ俺は考えた。  
黒いブラックホールにより俺はどこかに飛ばされたと考えるのが妥当か。そしてここは異世界？  
そんなことを何分かの間考えてた。

大樹たちは俺を見下ろすように佇んでいる。  
少し銀色の花粉も飛んでいるように見えた。  
初めて見る光景に感嘆しながら考える。

くそつどもれもこれも工藤のせいだ。俺の不幸はすべてアイツによって引き起こされる。アイツがいなければこんなことに会わずに済んだというのに忌々しい。

考えた結果として異世界トリップ。理由は時空の歪みによるせい。

工藤と俺が巻き込まれた理由は知らない。

そして感じるこの世界にいる工藤の気配。

この世界でも俺は天才だがやつは俺を超えている。それは悔しいが覆せない。

しかし俺がさらに強くなればいいだけだ。

だがそのためにもまず第一に状況の完全把握。情報はすべてにおいて相手を上回る要素となる。

知ってやるのと知らずにやるのが大きく違うようにだ。

俺がどこかに飛ばされた事は完璧だ。誘拐は考えにくい。

ここはさつき考えたように圧倒的超常現象による空間の歪みとでも仮定しておく。

次に体が動かない。こんな誰が何をしてくるかわからないような場所に何時間もいるのは危険だ。

そしてさき程から感じる体の違和感。俺は仰向けのまま視線を下に向ける。

このまま見れば俺の下にあるのは一緒に飛ばされた制服と靴と見慣

れた日本人としては身長の少し高い体のはずだ。

しかし俺が目にしたのは全く別の体だった。驚きが体に伝わっていき。

その下にあつたのは、すぐに傷がついてしまいそうな白い皮膚に肩までかかる黒い髪の毛、身長も175センチから150センチの小学生的ような体系になっている。

近くにあつた水たまりで顔を見るとそこには切れ長の目と眉毛まで掛かった黒い髪の毛みどちらかというところとピンクの唇に先の別れた舌。

えっ蛇人間???

まあかつこいいので気にせず次のことを考える。

そしてここで異世界転生という説が出てきた。俺も小説を何回か読んだが異世界トリップではないだろう。

次に周りをよく見ていく黒い光が俺の周りに集まっていた。黒い球体は少し透けていてその後ろの木が見える。黒い球体の大きさは葉っぱ1枚の大きさから15枚合わせたくらいまで様々だ。更に見ていて分かったが俺の視力はかなり上がっている。見ようと思えば思うほど景色はよりきめ細かく俺の目に映る。

黒い光をもう一度注意深く観察する今度は考察と実験もしてみる。まず木をすり抜けていることから人体には影響がない確率があるこ

とが分かる。試に近づいてくる一つを掴む。

黒い球体はそのまま俺の中に入ってくる。なっ！すり抜けるんじゃないのか。

驚き後ずさると共に離れろと念じると、その瞬間ほかの黒い光が俺に近づかなくなる。

もしかして俺の思考により操れるのか？『こちら素早く来い』

今度はすこし速い動きでフワフワと全方位から向かってくる。

俺はかなり感動した。

まさか思考だけで操れるものがあるなんて。

それにさっき一つ手に入れた感覚でわかった。

これは俺の力となっていく。黒い球体を俺の中に取り込むことによりほんの少しだけだがわずかに筋力、思考力が上がった。他にも瞬発力、スピード、持久力の全てが上がった可能性も大きくある。

つまり取り込めば取り込むほど俺の能力も上がるということだ。

「俺に集まり取り込まれる」

光はその言葉を待っていたとばかりに俺に急速によってくる。

俺の心臓に大量の淡い黒い光が力となり入ってくる。

俺は急激な活力と眠気と激痛に襲われ地面に横たわった。地面に音が響くが光はまだ幾億とその身を輝かせながら宗也の中に入っていた。

そして大樹の下で眠る宗也の半径5000mに至るすべてを黒い空間は覆い尽くしていた。

俺は体をゆすぶられる感覚を覚えながら意識を覚醒させていく。声が聞こえてくる。だんだんと声は大きくなり耳に響いていく。

「宗也、起きてください」

目を開いて見えたのは黒い髪を腰までなびかせた俺と同じくらいの身長少女だった。少女の肌は俺と同じように白かったが蛇のような白色の俺の肌と違って少し柔らかそうな質のいい肌だった。俺はまず敵か味方かの判断を行い様子、行動、声音から敵対意志のなしを確認する。

敵対意志はなさそうなので聞いてみることにした。

「お前は誰だ？」

「私は黒の霊峰光でありその集合体。」

靈峰光とはこの世界に存在する魔力に魂の一部が宿ったもので、集合体の私のことは靈峰体と呼ぶ」

耳に響くボーカロイドのような声で淡々と俺の問いに答えた。えらくぶっ飛んだ世界に飛んだものだ。

ここは中学二年がかかる病がはこびる世界なのか？

まあこの大樹を見れば少しそんな感じもするなと改めて思った。

「わかった。じゃあ俺の名前を知っている理由は？」

「宗也の記憶の照合をしてからだった」

どうやってしたんだと思いながら頭の中をいじくられた感じがあるか感じてみる。

すると何故かこの世界の知識があった。記憶を読み取る能力と記憶を分け与える能力と考えるのが妥当か。

つまり記憶の照合とともに俺にこの世界の簡単な知識を詰め込んだようだ。

事実くわしい事は思い出そうとしても思いつかない。

「俺の中にあるこの世界の記憶はお前のだな。

つぎにお前はなぜ俺に従っている？」

疑問に思っていたことを聞いてみる。

そして靈峰体の記憶は様々でこの世界の情報と知識が大きく特化されている。俺にはさっき始めた見たはずのこの大樹が何百回も見たことがあるからだ。この森の地形も靈峰光がうるついたであろう場所の地形などが全てわかる。だが、こいつの記憶には一般的に視覚で見た記憶しかなく聴覚、や思考したことがまるでないただの写真だ。



「私は元々宗也の力だから」

俺の力？この見たことのないこいつが俺の力だった？この世界には一度も来たことはないし元々こんな力もなかったはずだ。

「俺はこの世界に来たことがあるのか？」  
「応聞いてみる。」

「ない」  
当然か。

「お前は地球にいたところから俺の力だった？」

「違う」

平坦な声で答える霊峰体。

.....。

「俺の前世がその力を持ち、この世界で死に俺に転生し俺がこの世界になぜか来た」

「そう」

.....まさか合ってるとはな。

「前世の記憶を俺は知らない。なぜおまえが俺の力なのかを教えろ」

「私も覚えていない。でも私が貴方の力なのは分かる」

どっただけ曖昧なんだ。  
そして最後に確認してみようか

「この世界に俺と似て全く違うような魂と一緒に転生して来なかったか」

少女は顔をゆがめる

「来．．．た」

少女の形をした何かは悲しそうに呟いた。

なら目標は決まった。

俺は憎しみを声に乗せて高らかに言う

「俺はそいつを殺すことにする。世界に俺より上の人間はいらない。俺が最強それだけが一番大切なことだしな」

少女に向かって俺は笑う。

「分かった」

少女は肯定と取れる頷きをコクンとする。

少女はその妖精のような小さな頭を俺に下げて小さな声で言った。

「全ては  
のために」

何かつぶやいたように聞こえたが俺には偶然聞こえなかった。



## 第一話、魔獣狩り（前書き）

お気に入り増えないかなー。

誤字脱字があれば報告してくださいとありがたいです。

## 第一話、魔獣狩り

霊峰体の名前は呼びにくいことと霊峰体はカッコ悪いということとでレイちゃんと呼ぶことにした。

見た目がロリコン臭漂うボーカロイドそのモノなレイちゃんは感情が特にないこともあって機械にしか見えない。

そこで少しでも堅苦しい雰囲気を取り除くために名前にちゃんを付けて呼ぶことにした。

ヒロイン化を強引に推し進めることにより俺の生活に華やかさを足すのが目的だ。

「それでこの世界の生物の基本方針は戦闘によるレベルアップと、自分の種族の繁栄を目的としていて、戦闘により勝ち残るために多種族の殺害をしたり魔獣の駆逐をすることによりレベルアップをして進化していくといふことか」

これは全て記憶から読み取ったモノだ。

そして進化とは存在のレベルが上がることを指す。例えば緑色の体に身長の高いゴブリンならホブゴブリンという大人くらいの身長に長い角が生えたようしとなり、基本的な攻撃力、防御力、速さがかなり上がる。

そして今や人類や他の魔獣たちの進化による発展が現在の自分の種族以外を殺し合うという状況となった。

レイちゃんは俺をちらりと見ていう。

「そう」

首を縦にしてコクリと頷く。

「でも宗也の進化形はまだ見たことがないから早く進化して欲しい」  
急に言われても無理なので軽く発言を流す。

レイちゃんが俺のことを宗也と呼ぶのは「昔、仲が良かった気がするから」だそうだ。

俺は俺がレイちゃんと呼んでいることもあって恋人っぽい気もするが関係ないかと思って放っておいている。

意志疎通ができればレイちゃんに感情がないことなんて俺にとって  
は特にどうでもいいことだしな。

まあ俺には幼女趣味はないが美少女しか釣り合わないと思うのでレイちゃんは見た目もかなりいいから俺と一緒にいると逆にかわいく見えるんじゃないかと思う。

どちらにしろレイちゃんと俺は体系や体格が同じくらいなので身長的にも調度よくまさに兄弟という感じた。

俺は一度、頭の中にあるレイちゃんから聞いた事を整理していく。

「俺の種族は白蛇人しろへびびとでその希少種。希少種は10億分の1の確率で現れる。

普通白蛇人には強靱な鱗がついているが俺には鱗がなく白い肌となり人間に酷似している。

そして能力として俺には全種族との意思疎通が可能。

つまりこの世界でもどうやら俺の才能は一線をがしているということか。

だがそれならアイツも更に……、希少種の更に上の創造種くらいの段階にいと予想しておいて間違いないな。

創造種は基本現れないと言われるが間違いなくそれくらいの種族に

奴は転生してくるはずだ。  
なら奴の種族になるだろう種族はチェックしておくか。

まあ俺の転生先として使われた白蛇人自体かなりの希少生命体でめつたに現れない。

そして特性として常に幸運を身にまといていることで神龍と同レベル程度の幸運だと言われている種族。

つまり性能はかなりいいと思っていだろう。

他にはレベルはある程度、上がれば世界の声というものが聞こえてくる。

そのときに進化はすることができる。基本はこんなものか」

その後は頭の中で、記憶の中にある地形や場所の名前を整理していた。

数分後、口を開く。

「よまずは強くなるために魔獣を殺しに行く。  
俺が殺せる魔獣はこの森に何体くらいいる？」

目の前に生い茂る樹木を見ながら言う。それにしても大きいな。この森から近くの町までは走って約6時間かかる。

レイちゃんがすぐに答える。

「宗也ならまずこの守護者以外には負けないと思う」  
守護者に会わなければ死なないということか。守護者は貰った記憶からして銀の体毛のオーガだ。

俺には写真のような映像しか渡されていないため声は分からないが

威圧感だけでも相当なものだった。

「なら守護者は何体くらい倒せば勝てる？」

俺の疑問にレイちゃんは疑問形で曖昧に答える。

「六十くらい？」

可愛らしく首をかしげて言うが、声を聞いていれば淡々と言っているので全然かわいくなかった。むしろ

その数の多さに少し気がそがれた。

余談だが、俺の服装は白いぼろきれを着ているだけだ。レイちゃんは黒いワンピースを着ている。

俺だけぼろいのは気に食わないが店を見つけて買えばいいだろうと思っっている。

さっきの話を聞いて魔獣を60匹倒すのに毎回魔力を使っていると必要なとき魔力がなくなる可能性がある。

そこで俺は武器が入りそうだと思えば武器を作ることにする。

武器をつかえば魔力の温存につながり更に自分の体力も上げることができ武器を使う練習にもなり3つも得をするからだ。

俺はレイちゃんに「ついてこい、武器を作りに行く」と言って地図を思い浮かべながら歩き出す。

俺の行動する範囲は大樹から半径60メートル以内の木々の間だ。

その中で使えそうな鉱物を探して出していく。

なぜなら大樹の周りには魔獣が寄ってこないことは記憶からわかっているためだ。



魔物と戦っても魔力だけで勝てる気もするが念のため武器も作ってから行くことにする。

森の中を軽く走って探索していく。

今の俺は秒速10メートルのスピードで長時間走ることができるよ  
うだ。

木々の間を縫うように走るのにも動体視力が地球にいた時とは天と地はどかけ離れているため、どんなに速く走ってもそこまで苦勞はしなかった。

だが俺が鉱石を取りに行く前に教えてもらった魔法のことについて説明する。

魔法は基本的に火、水、土、雷、氷、風、無、空間、時間、がある。全部で9個だ。

基本的属性は火から無までの7属性で無とは魔力をそのまま形にして使うことをいう。

たとえば魔力に切れ味をイメージして使えば鋭利な刃物になるし、防御するために使えば瞬間的に盾を構築することができる。

魔法を使うには想像力と魔力の二つがいるが俺の魔力は莫大にあるため大丈夫だ。

想像力を並列思考をしながらうまく働かせるくらいは俺にとっては簡単なため魔法は使えるだろうと予想した。

そして7属性の魔法はこの世界の人なら大抵は使えるらしい。空間、時間魔法はかなり上位種でなければ使えないようだ。普通の人間が使える属性は普通2、3個らしい。

俺は全属性をくまなく使え更に空間魔法が特に適正値が大きいみたいだ。時空魔法は少ししか使えない。適正値が低いと魔力を大幅に使わなくてはならないのだ。

俺はそのまま魔獣と戦うつもりだったが、レイちゃんに「練習してからの方がいい」と言われたので仕方なく練習することにした。それに使い方だけわかっていても本番で使えない可能性もあるとは思っていたので練習はする。

「魔法はイメージが大切。魔力を使いたい属性に変換させるのは結構難しい。」

「一回じゃたぶん成功しない」

俺はレイちゃんの説明を聞きながら魔力を火に変換させてその火を刀になるようにイメージした。目の前に轟々と燃える炎剣が現れる。持ち手は熱くなく刀身は流れるように美しい。

もちろん俺は一回で成功させ、レイちゃんは発現した当たりから言っても無駄と思ったのか地面に自分の名前を書き始めた。

文字は明らかに異世界の文字だったが記憶から推測した。

レイちゃんが可哀そうだができるものはできるので炎の剣の次は水の剣を作り雷、氷、風、土、魔力で作った剣を数分間の間にすべて作ってみた。

時空魔法を練習することにした。時空魔法でできるのは瞬間移動と空間切断による防御だ。

俺の目の前に時空の歪みが現れる。そして空間を移動する。

移動は一瞬で、俺が対象にした場所に移動できていた。空間魔法で他にできることはあまり思いつかなかった。

というより亜空切断により一瞬で殺せるので使い道というより必殺技という感じになった。

しかし亜空切断を使った後に魔力がなくなった。

4時間後に何とか回復した。

レイちゃんは俺にすべての魔力を与え最低限だけの魔力しか持つておらず戦闘はできないと言われた。

結果、

魔法は簡単だった。

そして俺は武器を作るために鉱石を探しに言っている。

探知魔法をかなりの魔力で使い鉱山体を見つけた。見つけた場所に歩いていく。

地面に手を当て魔力を土属性に変換し鉱石を掘り出した。ずっしりとした重みの鉱石はかなり威圧感があった。

黒い鉱石は表面のほうは光沢があり光っている。  
宝石でいうとブラックパールに似ている。

「これは何だ」

「名称はエレクトロン。」

効果としては殺傷力上昇と魔力防御の無効化」

攻撃力特化の鉱石の様だ。

作るのは銃と刀と槍とだ。

俺は魔力を切れ味全開にして切り刻んでいく。

途中で休憩をいれても2時間で作った。

銃は両手に持って打つため小型にした銃が二つと刀は切れ味を意識した刀を5本だ。

切れ味は俺の魔力で作った刀よりは強いぐらいのレベルだ。

「さあ魔獣を狩りに行こうか」

一時間ほど歩いて大樹の守護範囲の外にでる。

歩いたのは魔力回復をしているためだ。魔力は自然に回復していき俺の回復速度は相当速い。

俺はそこから何メートルか歩いていくと泉を見つけた。

そこには黒い角をしたヤギのような魔獣がいた。

名前はブラックホーン。

走りが速く群れで行動する。

俺はブラックホーンを遠目から見ると、

銃を亜空間から取出しブラックホーンに向かって構える。

魔力による弾を作り出し銃に溜め込みんで撃ち出す。後ろではレイちゃんが余裕の表情で見ている。

なぜならレイちゃんは体を魔力で形作っているだけであり攻撃をくらわず死なないからだ。

戦闘が始まると思ったのか邪魔にならないようにレイちゃんは消えた。

打ち出した弾はブラックホーンのわき腹にヒットした。ブラックホーンが甲高い鳴き声を上げこちらを睨む。

憎悪に瞳を曇らせこちらに走ってくる。

15メートルあるんだ。もう一発撃って頭部に当ててゲームオーバーだ。

俺は魔力をため込み打ち出そうとするがその瞬間、俺は木々の間を縫って吹き飛ばされていた。

俺は無言で立ち上がる。クソッ、余裕をこきすぎていた。

俺は奴を殺そうとしていたんだ。

それはアイツだって本気で俺を殺そうとしているんだ。

そしてこのざまだ。情けない。

たかが獣が上位種の俺に勝とうなんて思っていた結果がこれだ。

この世界では弱者は死んで強者が生き残る世界、アイツは今まで勝

ってきたんだ。

だからあそこで水が飲めていた。そして俺はただの何もわかっていない餓鬼だったということか。

そして俺はこの世界で一番になると決めたんだ。

「だからお前には死んでもらう。ここまで生きてきたお前に味あわせてやるよ。」

市という敗北を「

感覚を研ぎ澄ませ相手を見る奴の鼓動の動きの一つさせも見逃さない。

俺の目は強く願えば願うほどすべての景色が鮮やかに大切なことだけを映し出していく。

ブラックホーンがその強靱な足で大地をける。

俺は魔力をためる。ブラックホーンは一瞬にして俺に近づいてくる。

俺は魔力弾を打つ。

魔力弾は吸い込まれるようにブラックホーンの額に当たり爆散した。森に大きな爆発が響いた。

血まみれのブラックホーンに言う。

「お前は強かった。払い弾丸が当たろうとも俺を殺そうとしてきたその心は俺にはないものだった。」

お前が一番初めの敵でよかったよ。」

『レベルが1上がった。称号「カオスオブブラッド汚れた血の証」を菊池宗也は手に入れた』

耳障りな効果音が聞こえてくる。

レイちゃんか俺の背後に立っていった。

「宗也は悪くない。その魔獣は負けた」

「分かってる。俺にはこの道以外ないのなんてとっくの前から知っている」

風が木々を揺らし目の前からは血の死臭が漂ってくる。

強者を殺して、自分のプライドを捨てて、弱者を踏みにじってどんなに恨まれおうとも俺は勝つ。

この道がどんなに汚れていようと突き進むことはやめない。

アイツに会ったその日から。

## 第二話、蛇の笑い声（前書き）

誤字、脱字があれば報告おねがいします。



## 第二話、蛇の笑い声

俺が魔獣、ブラックホーンを油断しながらも狩り終えた後、ほかの魔獣を探していた。

そしてその後俺はこの森の魔獣を殺していった。

最初に会ったブラックホーン以外にも魔物は殺していった。

例えば赤い体のトカゲの「デスプリース」は体長2メートルという大きさを毒の牙に振り下ろされれば木端微塵に破壊されるであろう爪などがあり普通に戦えば負けていただろう相手だったが炎を吐く前傾になった状態を狙い黒剣で目をつぶし何とか硬い皮膚を切り刻み倒した相手だ。

次に森の中間のあたりだ。そこで黄色い体に黒い縞々の模様の付いた「ローズビートル」は大きさはこれもまたでかく更に5体同時に襲いかかってきた。

先ほどのデスプリース相手に苦戦していたこともありこいつらとの戦いも苦戦をした。

魔力がなくなるギリギリまで炎系の魔法を連発して使ったこともあってなんとか倒したが毒針が一度刺さり途中から幻覚が見え始めたもののなんとか倒した。

俺は魔獣を倒すたびに上がる戦闘能力やレベルのおかげで更に、強力な粘液を出す「マッドワーム」や地面から突如現れ巨大な拳で俺を殺そうとしてきた「ギガゴーレム」などのモンスター相手に奮戦し倒していった。

今は森の中で休憩している。月明かりが俺を照らしていて、もう夜になったのかと思う。

白蛇人の特性で夜目と音と赤外線による索敵を常に行っているため安全なのだ。

俺はこの特性にかなり感謝した。

レイちゃんは俺の中にいて眠っている。

基本、レイちゃんは霊体として動かない限り役に立たないので気にしていない。

俺は夜の満月に向けて闘志を燃やす。

「絶対にアイツより強くなって見せる」

先ほどの戦闘で疲れがたまつたためかそのまま眠りについた。

『菊池宗也は称号「闇夜から蠢く魔王」アンデットナイトハイドを手に入れた』

朝、目が覚めるとレイちゃんが目の前にいた。

俺はうかつにも眠ってしまったことに気付いた。つまりレイちゃんはどうやら周囲の警戒をしてくれていたようだ。

俺としたことが情けないと思いつながらレイちゃんに軽く礼を言う。

そして炎系の魔法で昨日はぎ取った巨大トカゲ、デスプリースの肉をほおばる。

デスプリースの肉は硬くてまずかったが仕方なく食べる。

次からはもっとうまく食べれるように調味料でも作るか、と思う。



もうすぐ肩が千切れそうになるといところで魔力をロストウルフに流し爆発させた。

ロストウルフは悲鳴を上げながら後ろに後退する。

肩は1秒ごとに治癒されていく。昨日より明らかに治りが早いことに気付く。これがレベルアップの影響か。

俺は何もない空間から黒剣を取り出す。

俺は殺気を魔力と一緒に飛ばす。殺気と魔力が混ざった威嚇でロストウルフは錯乱状態になりふらついていき、そのまま地面に倒れることをどうにか野生の本能で保つ。

俺は殺気を飛ばした次の瞬間、ただ睨む。俺の黒かった目から紫色の魔力が流れる。

『スキル「魔王の瞳」が発動されます』

ロストウルフは動かない。まるで蛇にいらまれた蛙のように固まる。そして俺は更なるスキルを発動させる。手を黒剣で少し切り裂く。魔力を炎系の魔法に変換し流し込む。魔力は対象をロストウルフに指定し更に流し続ける。

『スキル「バレキユア・クレイウン悪霊誘う魔炎」が発動されます』

紫の業火がロストウルフの周囲を焼き尽くす。

ロストウルフは抵抗できずに即死する。

『バレキユア・クレイウン悪霊誘う魔炎』は相手の命を吸い取り燃える業火であり当たれば一撃必殺と言っても構わないスキルだ。

その代償が血と膨大な魔力だ。そしてスキルは今日初めて使うが圧倒的な能力に目がくらむ。

ロストウルフの死体はもう跡形もない。

紫の業火は周囲の木には当たらなかつたため地面に焼け焦げた跡があるだけだ。

この力は特別な時以外あまり使わないことにしよう。俺はそう思いながら次の魔物を探しに行く。

まだこのままではここの守護者に勝てないのは自明の理だ。

たかがこの森の通常モンスター程度に手こずっているようでは守護者など到底倒すことなどできない。

ましてや工藤には一生勝てないだろう。

そう思うと溢れかえるドス黒い感情が止められない。  
なぜアイツだけアイツだけアイツだけ。クソツ。

+\* > | >\* ? >\* ?

15体目の魔物を奢ったところで耳障りな電子音が鳴り響く。

『菊池宗也はレベルが8となった。称号「ソウル・キリング魂を切り裂く者」を手に入れた。』

この電子音も倒すたびに何度もなり、3度目の称号を手に入れた。称号は存在進化の過程で複数ある進化先の中からその進路を決めるものだ。

そして俺の手に入れた称号は、「カオスオブブラッド汚れた血の証」「アンデットナイトハイド闇夜から蠢く魔

王」とさつき手に入れた称号だ。

この称号から予測するにかなりひどい進化をするということが容易に予想できてしまい進化していいのかをかなりまよってきた。

そしてレベルアップや称号を得るたびに能力値が飛躍的に上がっていく。

さつきまで強かった敵はいまや俺の下となる。俺はこの感覚が大好きだ。レイちゃんは何回か「すごい」と言いに来るだけだが別に構わない。

最終的に俺が一番になることができればだ。

だから憎むべき俺の上に立つ工藤を殺す。何としてでも殺して俺が最強になってやる。

湿った地面を歩いていると不穏な空気に魂がゆさぶられる。

周りの木々は怖いほどにざわめき合っている。まるで全てを恐怖で包んでいるようなこの感じは工藤の圧倒的存在感と同じ俺より強者の証。

銀の体毛のオーガ、「ゲルライダー・ヒュレンス銀葬鬼人鬼」だ。近づいてくるたびに大きくなる恐怖の束縛。

俺は恐怖を殺し足を全力で動かす。その瞬間、後ろから恐怖が俺を追ってくるように掴みかかる。

どんなに速く走っても恐怖はこちらに迫ってくる。俺は常に抗いながら後ろを振り返るが何もいない。

そして走り出そうとした瞬間感じる粘りちてこちらを押し殺すような殺気。

俺は後ろから突如、吹き飛ばされる。地面を無様に転がりその姿を確認した瞬間感じるより濃密な恐怖。

足がすくんで動けなくなる。俺は考える。

今の状況でこいつを倒すのは無理だということを。  
銀葬鬼人鬼は足と手の付け根につけた銀の鎖と体長5メートルもある強大な大きさを俺を見下ろす。

目は俺を睨んで殺そうとしているようにも見える。髪の毛はどす黒い赤をしており後頭部から前へ曲がりながら伸びる黒い角は迫力をさらに押し上げている。

「グハハ、何ダ、タダノ、小僧力。  
シカシ、コノ、旨ソウナ、カオリ、ゲヘヘ、喰ッテヤルゾオオオオオオオオオオオ！」

銀色の鬼の咆哮で頭を揺さぶられる。

全身が恐怖で体が動かない。

絶対的強者の前に、殺される運命に、止められない力に、俺は負けることを確信する。

だが俺は諦めない。今の状況で勝てないのなら俺が強くなれない話だ。

世界に向けて魔力を放つ。鬼人をも簡単に凌駕する俺の魔力を全てはなちこの森の魔物を全て狩っていく。

鬼人が俺を殴りいたぶる「レベルが上がりました」。

鬼神が俺の片腕を「レベルが上がりました」飛ばす。俺の内臓を破壊して「レベルが」「レベルが」「レベルが」「レベルが」「レベルが」「レベルが」。

?>\* / . : . : 「 : 」 \*

人間が近寄らない深い森の中、そこにはたくさん魔物がいた。しかし黒い影に魔物たちはどんどん狩られていく。弱い魔物から強い魔物に至るまですべての魔物を殺していく黒い影は殺していくのをやめない。

銀の鬼は言う。

「コレデ、終ワリダ」

勝利を確信しながら銀の鬼は手に持っている棍棒で小さな蛇のような少年を殺しにかかる。

銀の鬼はただ負ける事など微塵も考えていなく棍棒を振り下ろす。

小さな少年は死にそうな状況の中、自分が死ぬわけがないという目をしながら銀葬鬼人鬼には聞こえることのない最後の一言を言い放つ。

「お前がな . . . . .」

血が飛び散りながら小さな蛇の子は死んだ。



「サアテ、タベルカ」

涎を垂らしながら少年に手を伸ばした肉片から無機質な効果音が鳴り響く。

『レベルが35になりました。規定値を突破したため存在進化を行います』

『YESオアNOかを選択してください』

『対象者が意識がないため自動選択されます』

『菊池宗也は「白蛇人」しろへびひとから「邪王蛇」じゃおうへびに存在進化をします』

さっきまであった肉片や血が紫色に変わる。血と肉は唯一潰れていなかった心臓に集まっていく。

心臓は激しく鼓動しながら黒い魔力を放ちながら血と肉を再生させていく。

鬼人は何が起こっているのかわからず呆然と前を眺めていきだんだんと焦りに変わっていく。

なぜなら全てを見下したような黒い魔力を周囲に放つ心臓に形がで



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7032z/>

---

勇者と魔王の戦い

2011年12月23日23時55分発行